

北 浦 遺 跡

1985. 3

長野県下伊那郡上郷町 建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

北浦遺跡

1985. 3

長野県下伊那郡上郷町建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序 文

昭和59年度において、町単道路改良事業で、南条近道線の改良工事を施行することになり、幅員4.5メートル、延長224メートルと決定し、工事計画の実施に伴い当路線の通過地点にある北浦遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行いました。

計画路線は既設の道路改良と一部新設部分で、町の教育委員会を通じて調査団長に今村善興先生をお願いし、大変なお骨折りを頂いて調査を完了し立派な記録保存を完成させることができました。

この北浦遺跡調査は、10月29日から11月9日までの間、今村団長指揮のもとに、地元作業員の方々を始め、多くの皆さんの御協力により発掘が進められ、当町では極めて珍しいフイゴの羽口片、鉄滓等の遺物が出土し、好資料と成果を得て、立派な中世文化の遺産を考古学の一頁にかざることができました。ここに報告書がまとめられるに当たり、本調査に御尽力くださった今村善興先生を始め調査に御協力を頂いた関係の皆さん、教育委員会の皆さん等多くの皆さんに感謝を申し上げます。

昭和60年3月

下伊那郡上郷町長 山田 隆士

例　　言

1. 本書は、昭和59年度上郷町道 南条線近道新設工事に伴う北浦遺跡「ひえだ」地籍の発掘調査報告書である。
2. 遺構の有無が不祥ぎみだったので、出土遺物（陶器片、フイゴ羽口、鉄滓、丸石）の出土地点の記録を主体として調査を進め、夫々の遺物分布を遺構図に記載している。
3. 本書の資料作成にあたり、現場での計測・記録図は調査補助員今村の協力を得て今村が当り、写真撮影は今村が担当した。遺物整理は林・今村の協力を得て今村が、遺物計測は主として林・今村が当り、整図は丸石は林、他は今村が当っている。
4. 本書の編集・報文執筆は今村が担当した。とくに丸石については用途不祥ではあるが溝から集中出土し、人為加工が認められるので、実測図と表にまとめた。
5. 出土遺物・測量原図等関係資料は一括して上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序 文	上郷町長 山田 隆士	1
例 言		2
I 南条地籍の環境		5
1. 位置と地形		5
2. 歴史的環境		5
II 調査の経過		9
III 調査の結果		13
1. 遺跡の概要		13
2. 遺構と遺物		13
(1) 溝状遺構 1.2		13
(2) 池状遺構		25
IV 調査のまとめ		27
1. 北浦遺跡中調査区の立地		27
2. 溝状遺構と池状遺構の性格		27
3. 上郷町低位段丘Ⅱ地籍の遺跡群の解明		28
後 記	上郷町教育委員会 北浦遺跡調査委員会	35

挿図目次

1図 北浦遺跡位置図	6
2図 周辺の遺跡分布図	8
3図 発掘地区土層図	12
4図 遺構位置図	13
5図 溝状遺構 1.2 と遺物（陶器片、丸石）出土位置	14
6図 溝状遺構遺物（フイゴ羽口、鉄滓）出土位置	14
7図 溝状遺構出土遺物	16
8図 溝状遺構及び周辺出土陶器	17
9図 溝状遺構出土丸石（1～10）	21
10図 溝状遺構出土丸石（11～14）	22
11図 溝状遺構出土丸石（16～21）	23
12図 池状遺構	25
13図 池状遺構出土土器、石器	26

写真目次

図版 1	フィゴ羽口と玉鋼状鉄滓	19
図版 2	円礫（丸石）	20
図版 3	北浦遺跡の立地と調査風景	29
図版 4	溝状遺構 1, 2	30
図版 5	溝状遺構 1 水落口	31
図版 6	溝状遺構遺物出土状況	32
図版 7	池状遺構	33
図版 8	出土陶器	34

I 南条地籍の環境

1. 位置と地形

長野県下伊那郡上郷町は、飯田盆地のほぼ中央に位置する。東は天竜川で喬木村と接し、北は土曾川によって飯田市座光寺・野底川上流山地で高森町・飯田市松川入に接している。南は、鷹巣山、風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎町・旧松尾村と境する26km²ほどの広大な地域をしめている。

この地域は、南流する天竜川とその支流によって形成されたいくつもの河岸段丘と扇状地の広い所で、古くからの人々の恵まれた生活舞台であった。伊那盆地全域に広がる河岸段丘は、火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘は、火山灰土を含む洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、火山灰土のらない沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱのもので、前の二者は普通上段と呼ばれる黒田地籍の各段丘であり、後者は下段と言われる飯沼・南条・別府地籍に当る。飯田市松尾地籍と共に低位段丘Ⅱが発達している地域として知られ、立坂段丘崖下の低位段丘Ⅰの立坂面に続いて、飯沼面・別府面・南条面が夫々南北に横廣く、高低差をもって、東西に続き、下伊那の模式地となっている。

南条面は、天竜氾濫原に続く最も低い段丘で標高400～410mくらいで、天竜川の現河床から3m～10mくらいの比高を測る。北は土曾川右岸から、農免道路周辺から矢崎の台地先端部の段丘面と、高屋線の上方、栗沢川から田中八幡社北方一帯の上段面が含まれている。西方にかけて、2～3m位の比高差を持って別府面・飯沼面・立坂面が彎曲しながら続くが、この低位段丘面は松川左岸の別府面と土曾川右岸の飯沼面の主体部が高く、南条面がその中間に彎入している形で、幅広い凹地とその下方に広がる最低位の段丘面と言う事が出来る。低位段丘Ⅱは元々湧水が豊富で、地下水も高く典型的な水田地帯であるが、南条面はその傾向が著しく、立坂崖下から南条にかけては、沼沢的な低地も多く見られ、水田地帯の中心部に当る。

南条北浦遺跡は上郷町飯沼の内南条地籍にあって、低位段丘Ⅱa1、南条面の上位に立地し、下位の段丘面とは3～4mの比高がある。南側は順次高さを増して栗沢川で別府面に、西は上述の別府・飯沼面、北は別府面の一部と飯沼面の主体部に取り囲まれている。

2. 歴史的環境

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細な布調査の報告によると、埋文包蔵地69か所、古墳32基・

1図 北浦遺跡位置図

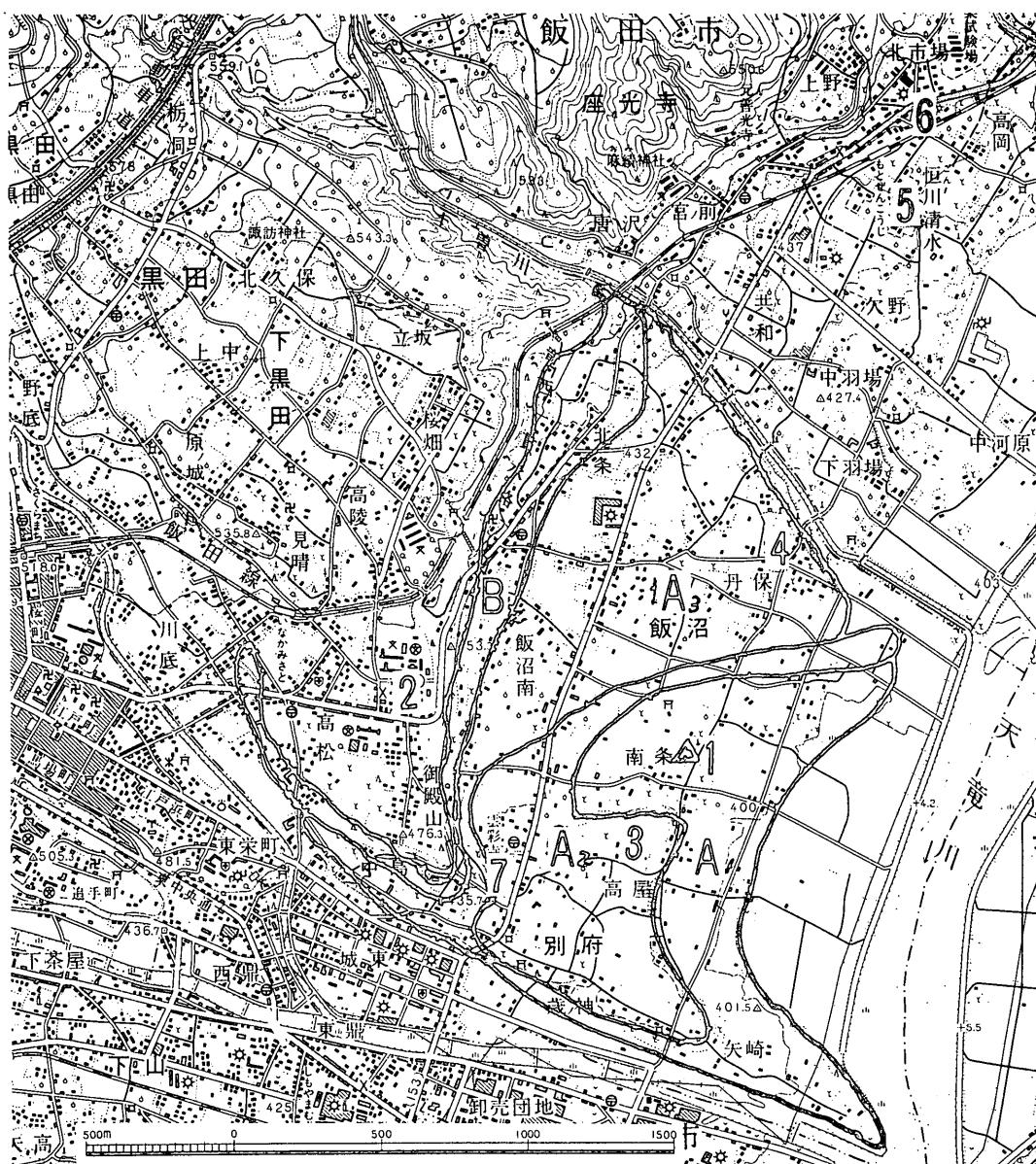


図1 北浦遺跡位置図

- | | | | | |
|------|---------|---------|--------|---------|
| 低位段丘 | A 1 南条面 | A 2 別府面 | | |
| | A 3 飯沼面 | B 立坂面 | | |
| 主な遺跡 | 1 北浦 | 2 高松原 | 3 高屋 | |
| | 4 堂垣外 | 5 恒川 | 6 高岡古墳 | 7 天神塚古墳 |

中世の城跡 3 か所の合計 104 遺跡である。南条地籍は、埋文包蔵地は棚田・竹ノ内・北浦・びくに田・一丁田・藪越・雲彩寺・堀尻の 8 か所、古墳は天神塚・中島の 2 か所である。この事は地籍の狭いこともあるが低湿地があつたり、沖積層が深く発見し難い面もあろうかと思う。遺跡の中心は別府面に属する藪の越、雲彩寺、一丁田等であろう。北浦・びくに田は、南の別府面の段丘崖から高さを減ずる段丘端にある遺跡で規模はわからない。南の別府地籍の別府面は全域殆んど遺跡で、別府古墳群がある。この内栗沢川右岸の高屋遺跡は、左岸の藪越遺跡と共に町内代表遺跡の一つで、古墳時代・奈良平安時代の重要遺跡とされている。対岸の藪の越遺跡は、高屋遺跡と共に縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安・中世に至る複合遺跡で、特に弥生時代中・後期、古墳時代前・後期の遺物出土が多い。びくに田、北浦遺跡も各期の遺物出土地と知られているが、とくに北浦遺跡内高田宅周辺から古墳時代後期の土器の出土が多く、栗沢川に近いあたりが遺跡の中心であろう。北側・飯沼地籍は古墳こそ少ないが、弥生時代から古墳・奈良・平安期の遺物出土が特に多く、別府地籍と共に当町の主要遺跡群地帯で、郡下の重要遺跡群として注目されている。

近年飯田市座光寺恒川遺跡群内には、特に古墳・奈良・平安時代の重要な構造・遺物の発見が続いている。古代伊那郡衙址が確実視されているが、関連遺跡の範囲は広く、同一段丘面に立地する、飯沼、南条、別府地籍も又重要地域と考えなくてはならない。古代伊那郡家がこの段丘面に存在したならば、この上郷の低位段丘面のどこかを古代東山道が通過した筈であろうし、郡家を支える生産基盤があった筈で、今尚、地字や地割にその名残りが残されている古代条里制構造存在を期待する重要な地域が多い。

別府・南条・飯沼・座光寺一帯の古代文化圏の高揚は中世にまで続くであろうことは疑いない事だが、その実証はごく一部に過ぎない現状である。歴史時代とは言い乍ら実証文献が極めて少ない以上、古字調査や考古学的調査が占る役割が大きい。その意味から、昭和57年町主体で実施された町内詳細分布調査による、中世遺物出土地42遺跡の記録は貴重である。その中低位段丘Ⅱに属する33の遺跡中、23遺跡が中世遺物出土地とされている。南条地籍では北浦・びくに田・一丁目・藪越・雲彩寺・堀尻遺跡と大部分が中世遺物出土地である。

南条は元来飯沼郷の一部であったが、脇坂の頃分離したと推量される。飯沼郷の北条に対する南条と思われ、二ツ田、四ツ田、一丁田、つぼの尻、道合、道下、桶クリワ、刀打、太刀打、九郎助屋敷と北浦等々興味深い古字がある。史実とは言い難いが、鎌倉権五郎影政勧請と伝えられる田中八幡宮・雲彩寺に残る宝筐印塔の伝説、田中八幡宮の大杉の存在、坂部熊谷氏の一族が南条に庵を結んだ説話、高田院殿全昌主膳大禅定門の話等々、興味深い伝承のある地域で、今回の様に相当量の中世陶器と製鉄工房関連遺構発見となると、どれか一つに結びつけたい話も残されている。いずれにしても、南条や、北浦遺跡だけではないが、自然的・歴史的環境の中に、飯沼・南条・別府遺跡群が立地している。

2図 周辺の遺跡分布図



II 調査の経過

1. 調査経過

昭和59年10月、上郷町建設課の町内道路整備計画の一連事業として南条近道線改良工事が開始されるに当たり、同町建設課と教育委員会の保護協議が成立し、上郷町教育委員会から今村に緊急発掘調査の依頼があった。

昭和59年10月29日、発掘資材を運搬し、道路センターを基準としその左右に2・4列のグリッドを設定し、C～Kのグリッド掘りをする。C・Eのグリッドから遺物の出土は少なかったが、砂質土・粘質土の堆積が厚く所によっては1.8mに及ぶ所もあった。（写真は1グリッド）、Gグリッドあたりから中世陶器片の出土が目立って来たので、3列も拡張していく。遺物包含層も1.2mほどあるので、重機による排土を計画し、10月31日にはGからL列にかけて排土し、更に上位地区道路拡張部分、5列Q列から西にかけてバックホーで排土した。ここも黒色砂質土が1m以上と深く、中世陶器片のはかは、土師器・須恵器片少量の出土に止った。西方上部も工事に合わせて1m幅に排土したが、ここも黒色砂質土と黄褐色砂礫土の堆積が1.5mほどあり、遺物



の出土は認められなく、累々と木材が横たわり低地の様相を示していた。Q列を北に3このグリッドも開けた。黒色土が深く中世陶器片の出土を見た。特にQ6では黄褐色砂質土下(1.4m)から大平鉢と石列が発見され、池状遺跡検出のきっかけとなった。下段ではフイゴ羽口、鉄滓、丸石、中世陶器の出土が多いので、分布状況を細かく記録しながら両遺構を探ることにした。11月1日

から、池状遺構の検出、工房址の検出作業に入る。池状遺構は石組内泥土中から、山茶碗大平鉢、青磁の出土が多く、竹、木片、種子、木椀も出土した。工房址では中世陶器片、フイゴ羽口、鉄滓、丸石等の出土が著しく、出土地域が帯状に続くことがわかり、11月2日になって溝状遺構の様相を示すに至った。11月5日から9日にかけ池状遺構・溝状遺構の検出を進め11月9日に現地作業を終了している。

なお、整理作業は主として2月10日から3月初めにかけて実施し、報告書刊行の運びとなっている。

「発掘調査日誌抄」

- 10月29日（月） 資材運搬、グリッド設定、2・4列C～Kグリッド掘り。
10月30日（火） 上方遺物出土のため、3L、4H、J、Lグリッド拡張、遺物出土が多くなる。
10月31日（水） 5列Q～Xバックホーによる排土。Q列6、8、10グリッド堀り。下方2・3列G～Lバックホーによる排土。池状遺構発見検出に入る。
11月1日（木） 池状遺構検出、鍛冶工房址の検出作業に入る。
11月2日（金） 池状遺構石組検出。工房址出土遺物出土地点記録調査続ける。
11月3日（土）、11月4日（日） 作業休み
11月5日（月） 工房址は溝状遺構と命名、出土遺物詳細記録をとりながら検出を進める。
11月6日（火） 溝状遺構は1、2となり、溝状遺構1、水落口検出。
11月7日（水） 雨天 作業休み
11月8日（木） 溝状遺構1、2検出終了、写真撮影。
11月9日（金） 測量、セクション取り、資材撤収。

2. 調査団組織

(1) 調査団

団長 今村善興 (長野県文化財保護指導委員)
(日本考古学協会員)
調査補助員 林敏 今村俱栄

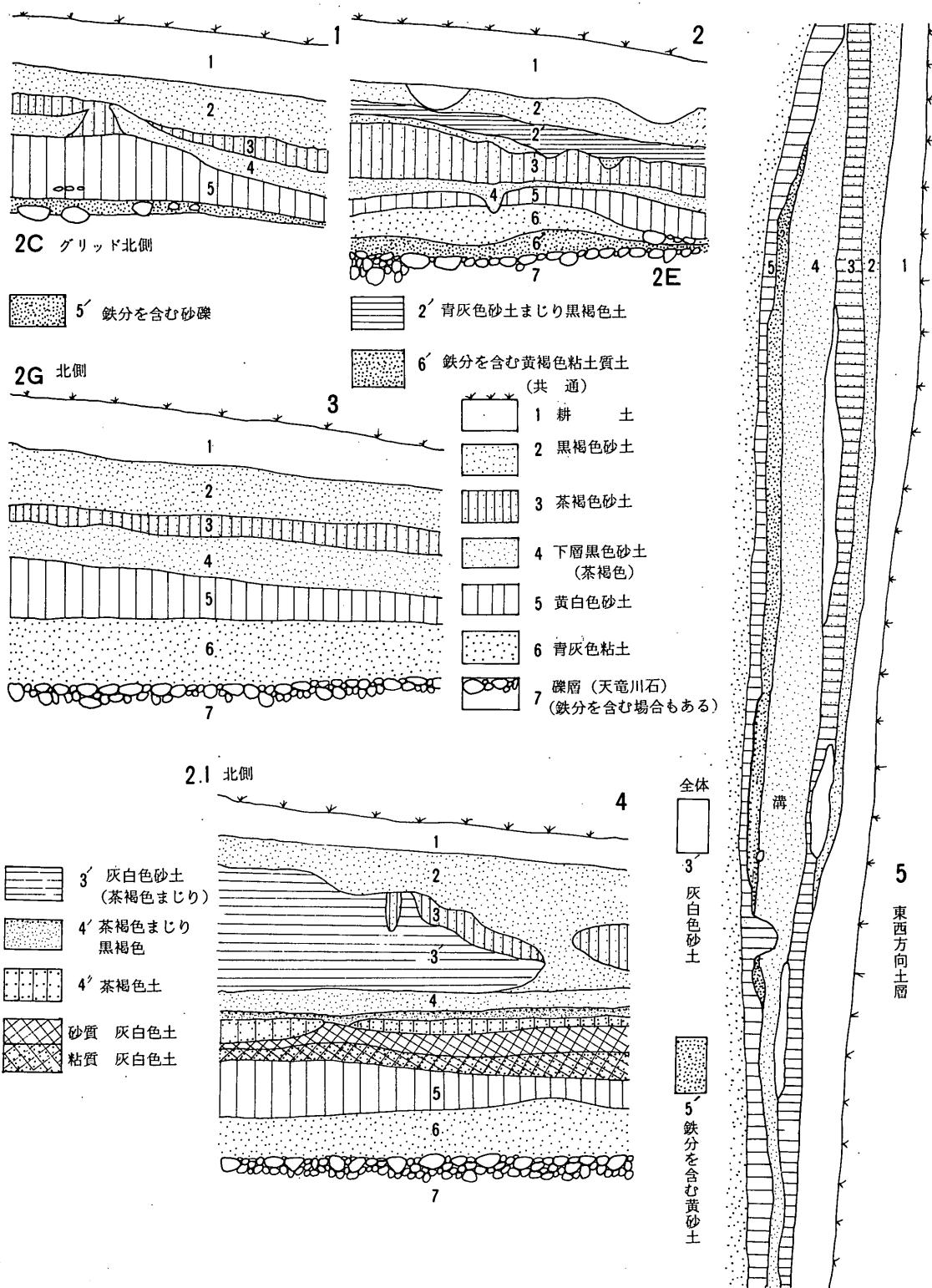
(2) 調査事務局

関島昌平(教育長) 篠田公平(教育委員会事務局長)
北原義信(建設課長) 吉川勝一(社教主事・係長)
宮下成式(建設課技師)

(3) 協力作業員

林 敏	宮脇 豊司	下井 次郎	下井イシェ
高田 春子	高田 善作	吉川 佐一	小林 明美
田平 君子	川尻 宗一	森 茂	上柳 鉄一
今村 俱栄	藤井興業（バックホー担当）		

3図 発掘地区土層図 1~4 (1:300) 5 (1:600)

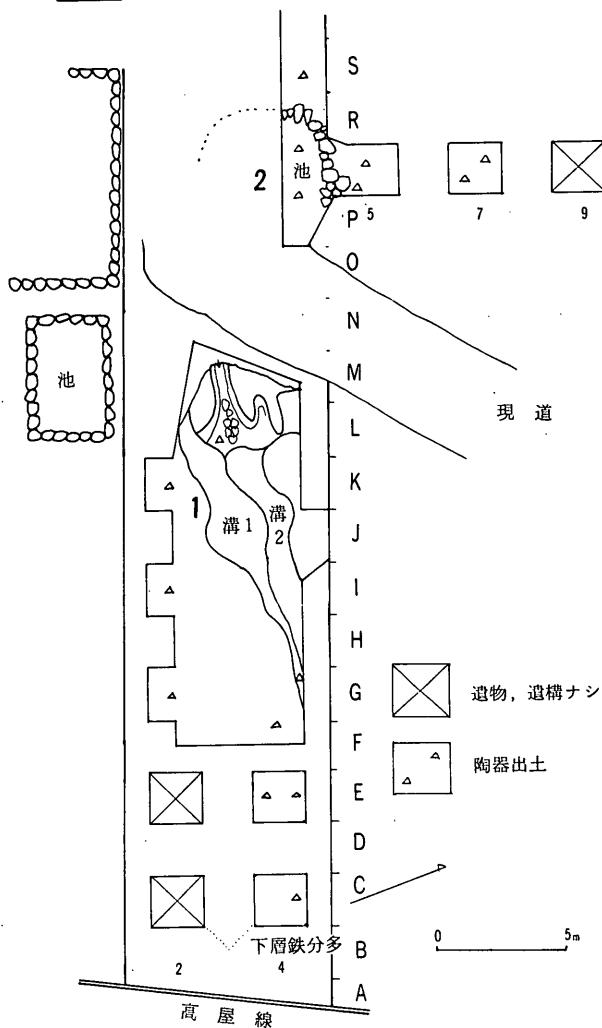


III 調査の結果

1. 遺跡の概要

北浦遺跡は段丘の先端部にあり、弥生時代・古墳時代の遺物出土、遺構の存在を予想したが、その遺物は表面で採集されたに止まり、池状遺構から須恵器甕片が出土しただけである。1・2地区共、少量の平安時代須恵器・灰釉陶器片のほか、山茶椀大平鉢・小皿・青磁・瀬戸灰釉・擂鉢等陶器片が多く、フイゴ羽口、玉鋼状鉄塊ほか鉄滓、丸石、角礫の出土が多かった。遺構は工房火床の発見はなかったが、時期不詳の固い床面、溝状遺構2、池状遺構が検出され、遺物から

4図 遺構位置図 (1:300)



見て中世製鉄工房に関連する遺構と推定される。

北浦遺跡は小段丘の先端部にあって、栗沢川左岸に広がるが、微地形を見ると、本調査区の南、栗沢川添いと、反対の北側がやゝ高く中央部は低い。即ち今回の調査区はこの低地に当っており、砂質・粘土質の堆積、流木の堆積等の発見がうなづける。又、位置的に良さそうに思う反面、弥生・古墳期の遺物は南側隣地では出土しているのに、調査区では発見されず、中世製鉄工房址に関連する、溝状遺構と池状遺構の発見に止ったことも、遺跡立地上興味深いことと思う。

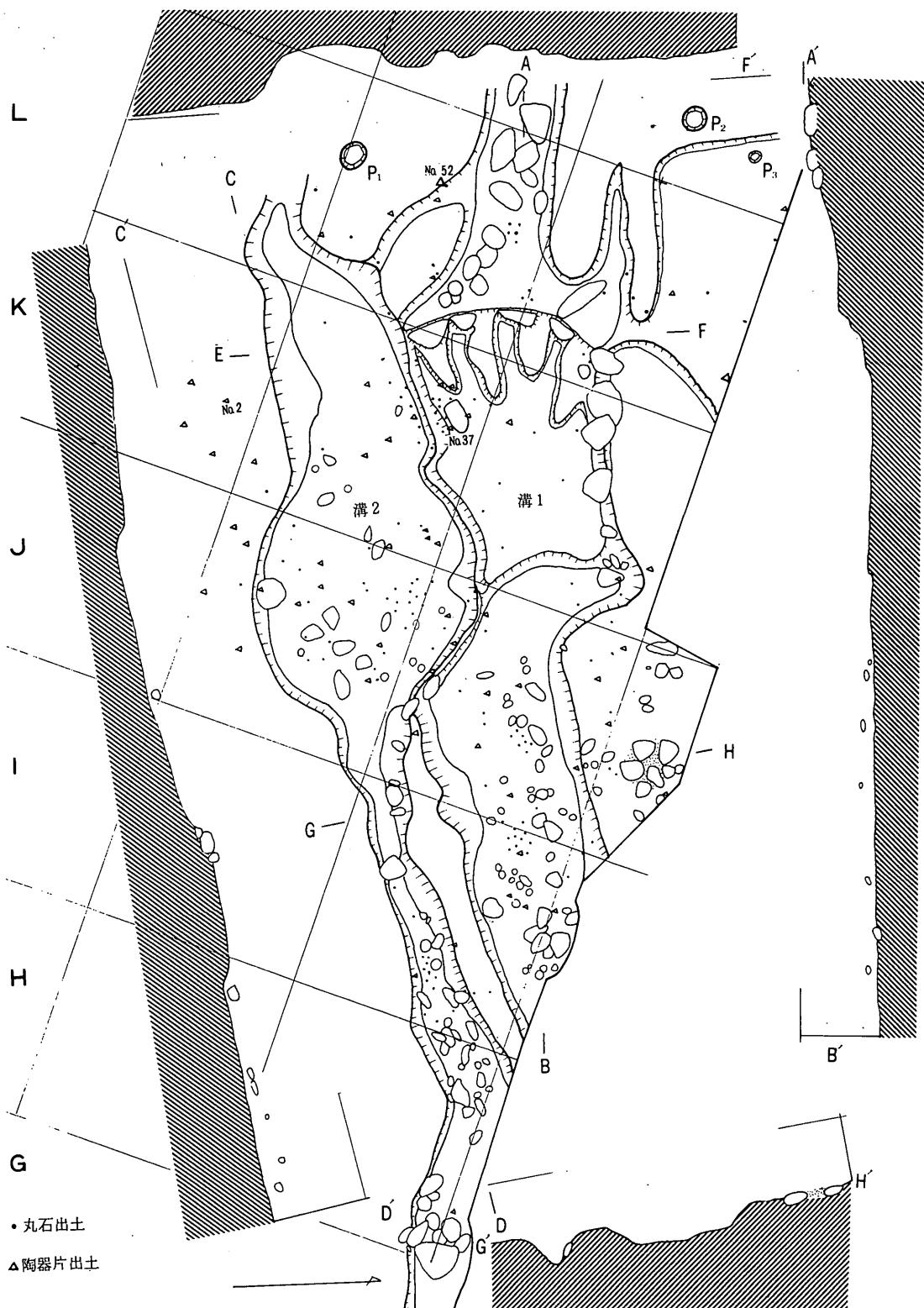
2. 遺構と遺物

(1) 溝状遺構1・2 (4図・5図)

① 遺構

遺構位置図(4図)の1がそれである。グリッドGからMにかけ

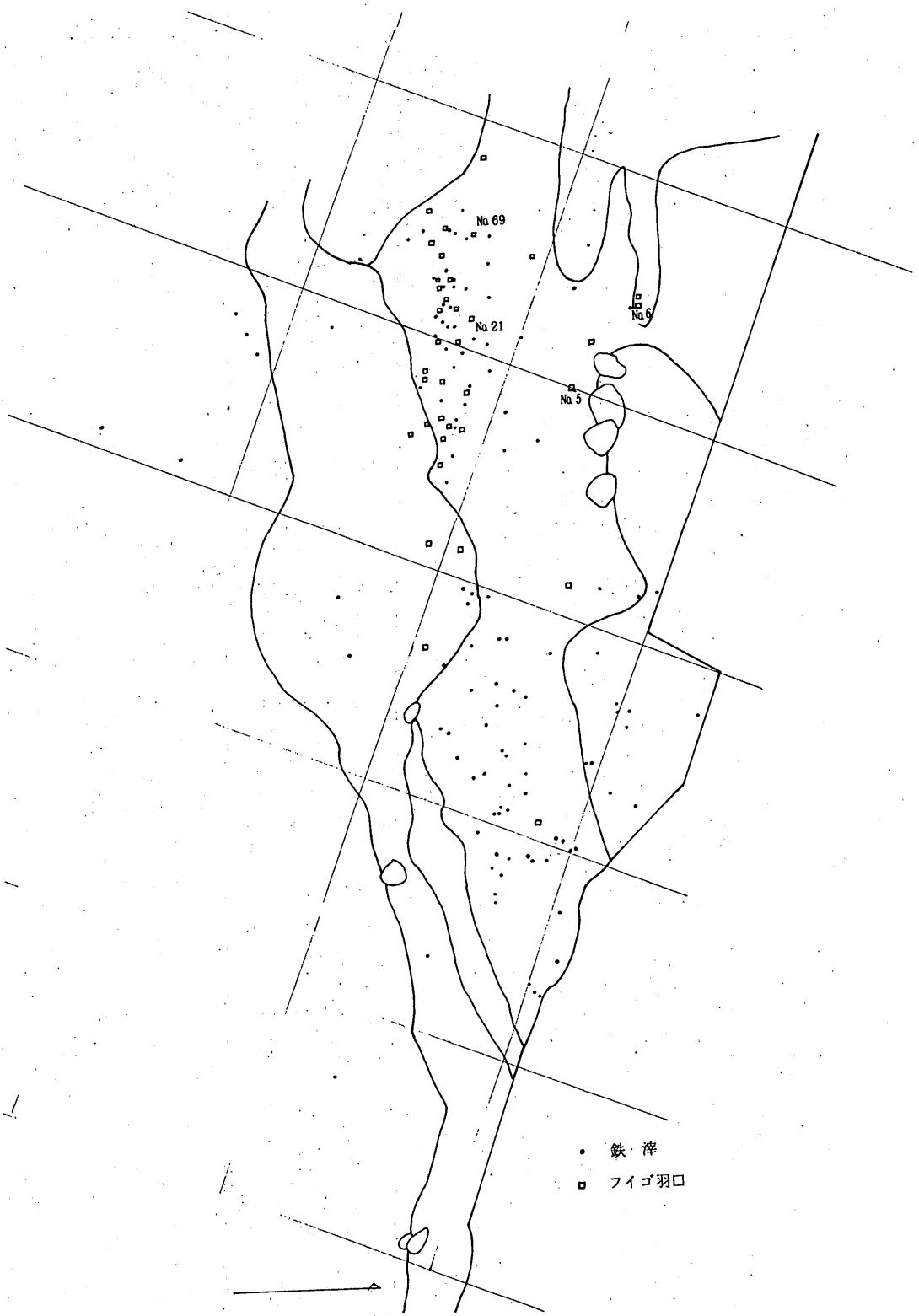
5図 溝状遺構1・2と遺物（陶器片、丸石）出土位置（No.1）（1:600）



● 丸石出土

△ 陶器片出土

6図 溝状遺構遺物（フィゴ羽口、鉄滓）出土位置（No.2）



ほぼ西から東へ地形傾斜に添って走る二条の溝である。下部黒褐色土層（5図4）と遺物包含層として黄白色砂質土（5）へ切り込んだ溝で、表土下80cm～1.1mの所にある。溝1を見ると、西側は道路のため調査できず不詳であるが、幅0.6m深さ30cmの溝があり中に角石、丸石が落ち込み、石下部には砂礫があり、水の流れが想定できる。溝底には鉄分を含む砂層で、2mほど東で20～30cmほど落ち込んでいる。人為的かどうかは不詳であるが茶褐色土、鉄分の多い層、黄色砂土、青灰色粘土層の堆積が4条ほどの凸凹（写図3）が観察され、水の落口の様にも思える。そこから幅2.2m、深さ15cmほどで東へ続いている。溝内には大小さまざまの河原石の円礫、角礫、小丸石が多く、その上下にフイゴ羽口の破片、玉鋼状鉄塊を含む多くの鉄滓、陶器片の出土もあった。溝というよりは浅くて幅広い低い部分と言った感じであるが、円礫や遺物は覆土の茶褐色中と溝底に近い黄灰色砂礫（鉄分多）中から出土している。溝2は、溝1の南に並行して走り、上方は茶褐色から落ち込み、上半分は1.5m以上と幅広く深い。溝1に比べて10cmほど高い。東半分は、溝1との間に黄白色砂質土の土堤を持ち、狭い所は20cm、広い所で50cmあり、深さは30cmほどの所もある。溝1と異って砂礫は殆んど見られない。遺物の出土を見ると、陶器片と円礫の出土は変わりないが、フイゴ羽口と鉄滓は溝1に集中し、溝2からの出土は非常に少ない。

北側は用地外で遺物出土も続いているが拡張できなかったのが残念であるが、グリッド5Jは溝より高く、陶器、鉄滓の出土も見られ、僅かではあるが焼土を囲む集石があった。これだけでは確証はないが、気になる場所である。西上方にピットが3こあった。落し水の溝に添った位置にはあるが、この上層に中世以降の固いたたきがあったこと、中世遺物が少ないと後世のものとも思われる。

西上方の落し水状の溝と、上方にある池状遺構との関連が気になる所ではあるが、調査不能で惜まれる所であるが、位置関係、距離、類似した遺物出土、後述山茶椀片口鉢が、池のものと接合された事から、同一時期、関連遺構と見たい。遺構から判断出来るものはないが、後述遺物のフイゴ羽口4こ体、鉄滓の量が多く大型であること、しかも玉鋼状鉄塊が含まれている事から、製鉄遺跡と見たいが、火床はどこにあったのか、池・溝をどう利用したのか、多量の大小の円礫の用途は何か、課題は多い。

② 遺 物

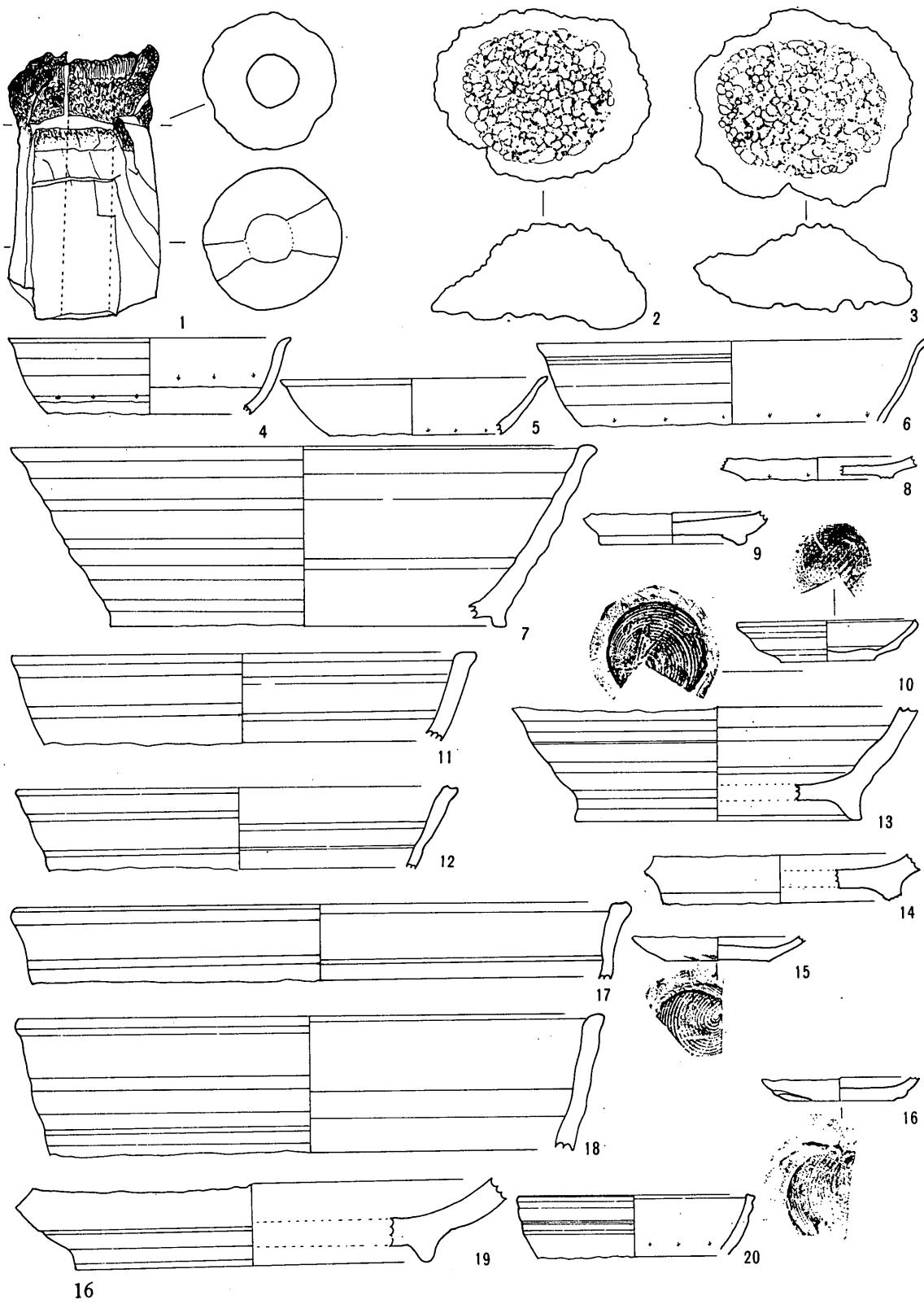
ア 陶器（5図・7図・8図）

5図で見られる様に、グリッドからも陶器片は出土しているが、大部分は溝状遺構又はその周辺で、須恵器片5、灰釉陶器片9、山茶椀片30で大平鉢片が多い。青磁椀・鉢片13、常滑系陶器1、瀬戸灰釉椀片10、擂鉢片6、天目椀片5、土師質坏片8等が主なものである。

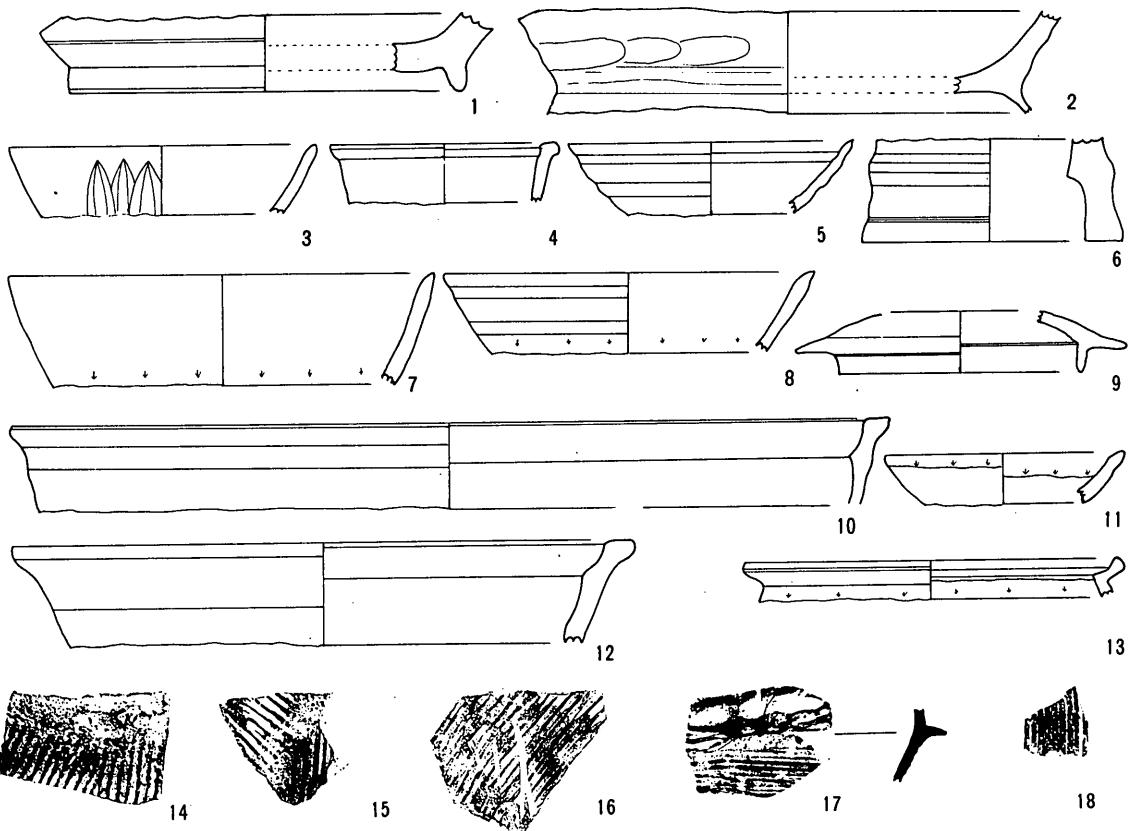
7図4～5は灰釉椀片で、釉は乳白色のもの、7・11～14、17～19、8図1・2は山茶椀、大平鉢片ではり付高台が目立つ。底部を見ると、内壁の磨痕が見られものが多い。8～10・15・16は、山茶椀系小皿で、付け高台のものと平底糸切底のものであり、20は山茶椀系小鉢片である。

8図3・4は青磁の輪花椀と香炉か鉢片で明緑色、5は土師質平椀、6は常滑系器種不詳、7

7図 溝状遺構出土遺物 (1:3)



8図 溝状遺構及び周辺出土陶器 (1:3)



・8は瀬戸系黄白色釉の椀、9は黒釉の蓋、11・13は、青灰色釉の皿と鉢の口縁、10・12は胎土灰白、紫塗の擂鉢片、14～16は須恵器片、17は土師器、18は擂鉢片である。時期的には相当の開きがあろうと思うが、山茶椀は13～14世紀頃、瀬戸系平椀、皿、擂鉢等で見ると14～15世紀に比定されそうに思う。

イ フイゴ羽口 (6図・7図・写図1)

溝状遺構1の上方から散乱して出土した36点余から接合したり、分類してみると4こ体はあつたと考えられる。6図1は10個の破片で復原されたもので、全容は不詳、胴径6.5cm、熔解タール状付着部6.5cm、孔径は2.3～2.1cmである。他のものは復原不能に近い。1の破片の出土位置を見ると、6図5・6は胴部大形、21・69はタール付着頭部片で、1.6～1.8m離れた位置にある。個々の羽口の大きさと、散乱状態から見て、故意に溝の中へ投げ壊したものと思われる。

なお確とは言いたいが、比較的大形のものは北側に多く、剥片状のものは南側に多いことから推して北側から投げられたと見たい。

ウ 玉鋼状鉄塊と鉄滓 (6図・7図・写図5)

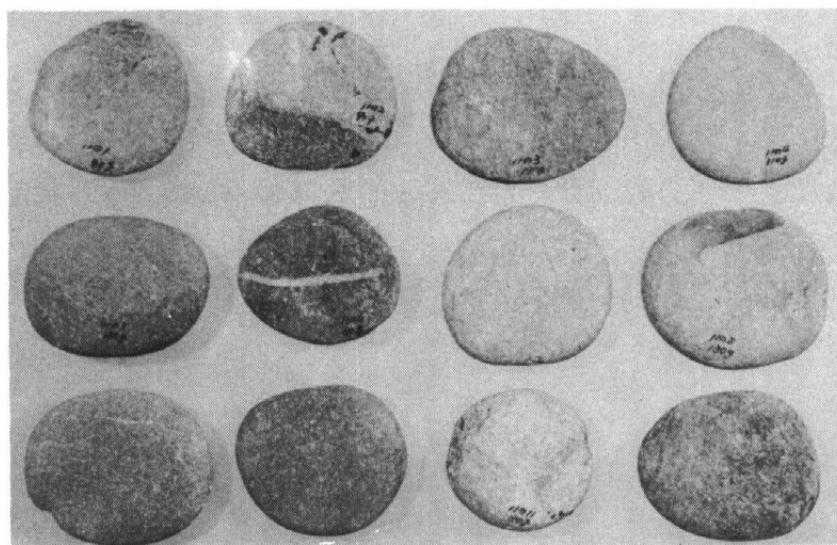
6図で見る様に大小さまざまな鉄滓は114以上出土し、多くは溝状1の上・下層から出土している。出土地点は記録したものの、遺物の性格上個々の分類整理を怠った事が悔まれるが、大形

重量のあるものは、J列に多かった。7図2・3は代表的な鉄塊で、写図5の4・5・7のものである。2は500g、3は450gある。純粋の鉄の半分くらいの重量ではあるが、鉄滓としては比重が高い。形態は扁平な半球状、上面球形状部分は海綿状である。この事から推量するに、砂鉄を熔解させて、るつぼか、それに変わる容器か場所に流し込んだ時、気泡の脱出を物語るもので「玉鋼」と見たい。写図5には其の他の比重の多いものを並べたものであるが海綿状のものも多い。一部にアメ状鉄滓もある。中に割れたものもあり、中を見ると中央部に鉄性分の固ったものもある。

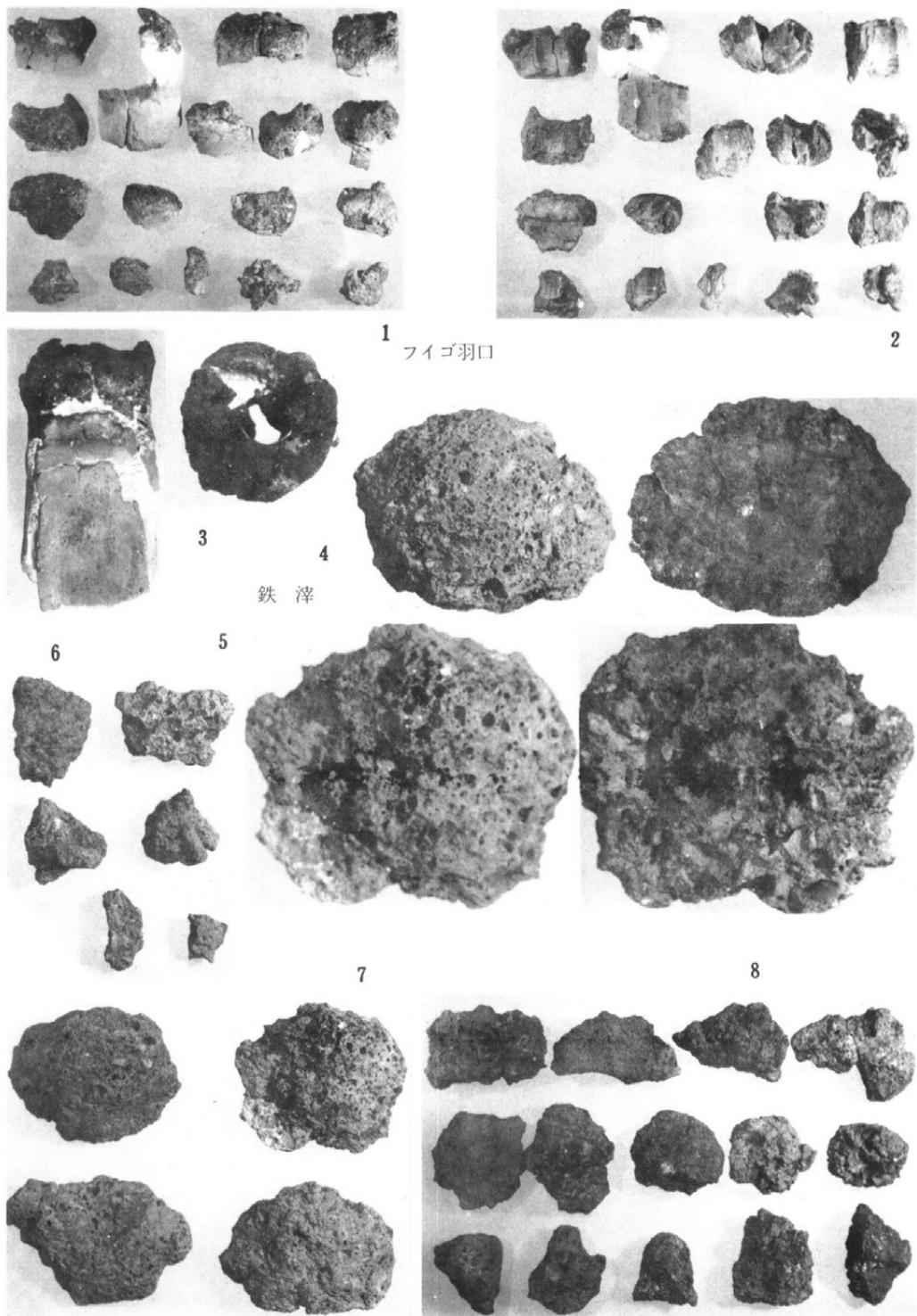
エ 円礫・剥離の多い石（5図・9・10・11図・写図6）

円礫や割石が多くあったがその分布を5図で見ると、溝1・2の範囲に集中している。印で表わしたもののは、図9・10の1～12くらいのもので、収録したものは148c、それ以上に大きいものは、5図の溝中に記録された石の中に含まれ50c以上ある。大きさ形態を見るとさまざまであるが、共通していることは天竜川転石で、殆んどが硬砂岩である。小さいものは1.5～2cm、3cm～7cm幅のものが最も多く、中には18cmに及ぶものもある。一部には球形状に厚いもの（2・3組）分銅状に細長いもの（6・14・17組）があるが大部分は円形又は隋円形で扁平である。1・4・5・7～12の組がその特長を示している。（写図6）天竜川転石をそのまま使ったものでないことは、どの石にも、どこかに擦痕が残されている。両面、周囲をていねいに磨き上げた1の組の小石、球形状に整形したと思われる2・3組の丸石、細長く分銅状に整形し、周囲を擦り整えた6組のもの、その他丸・隋円の扁平石は、周囲を擦り整え、両面又は片面のどこかにたたき凹めた部分を持つもの（9図・写図2の4）がある。重量についても大小様々であるが、各組毎に見ると割合平均した数値が見られる。

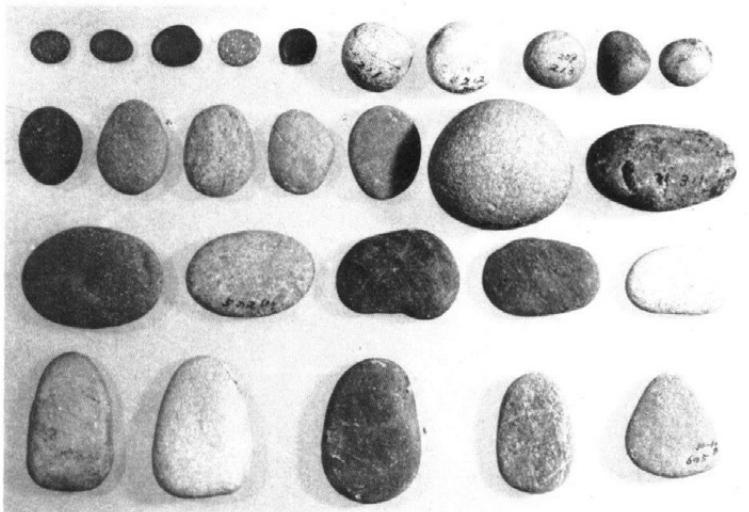
用途は何であるか不詳であるが、以上、出土地域が溝と池状遺跡に限定されていること、形態、整形状況等から意図的なものと思うので載図した。



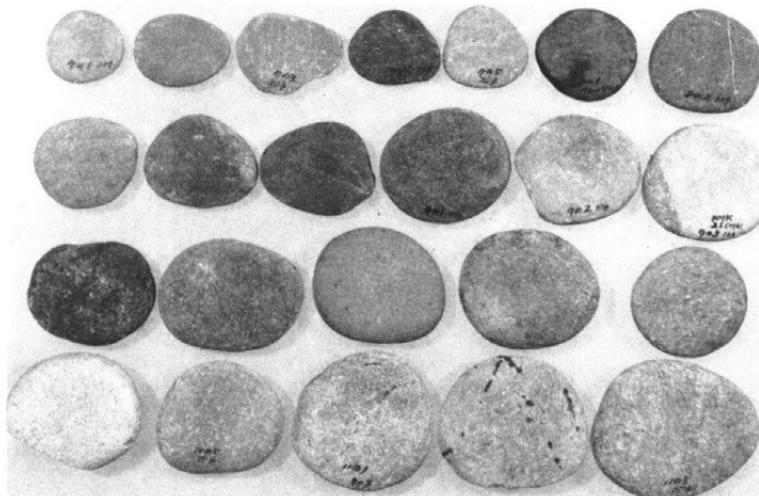
図版1 フイゴ羽口と玉鋼状鉄滓



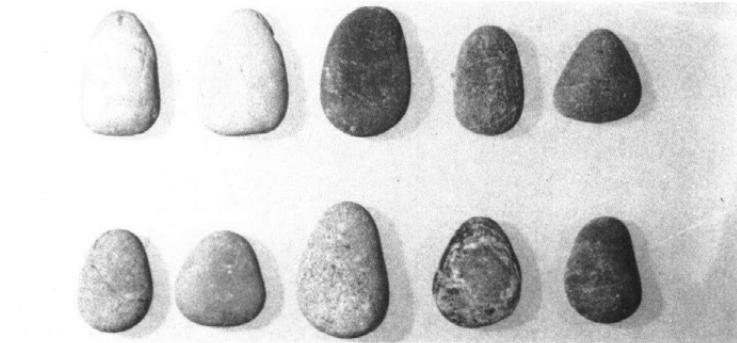
図版2 円礫（丸石）



1 1 ~ 6 組



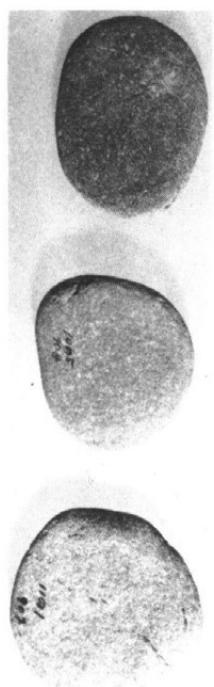
2 7 ~ 11 組



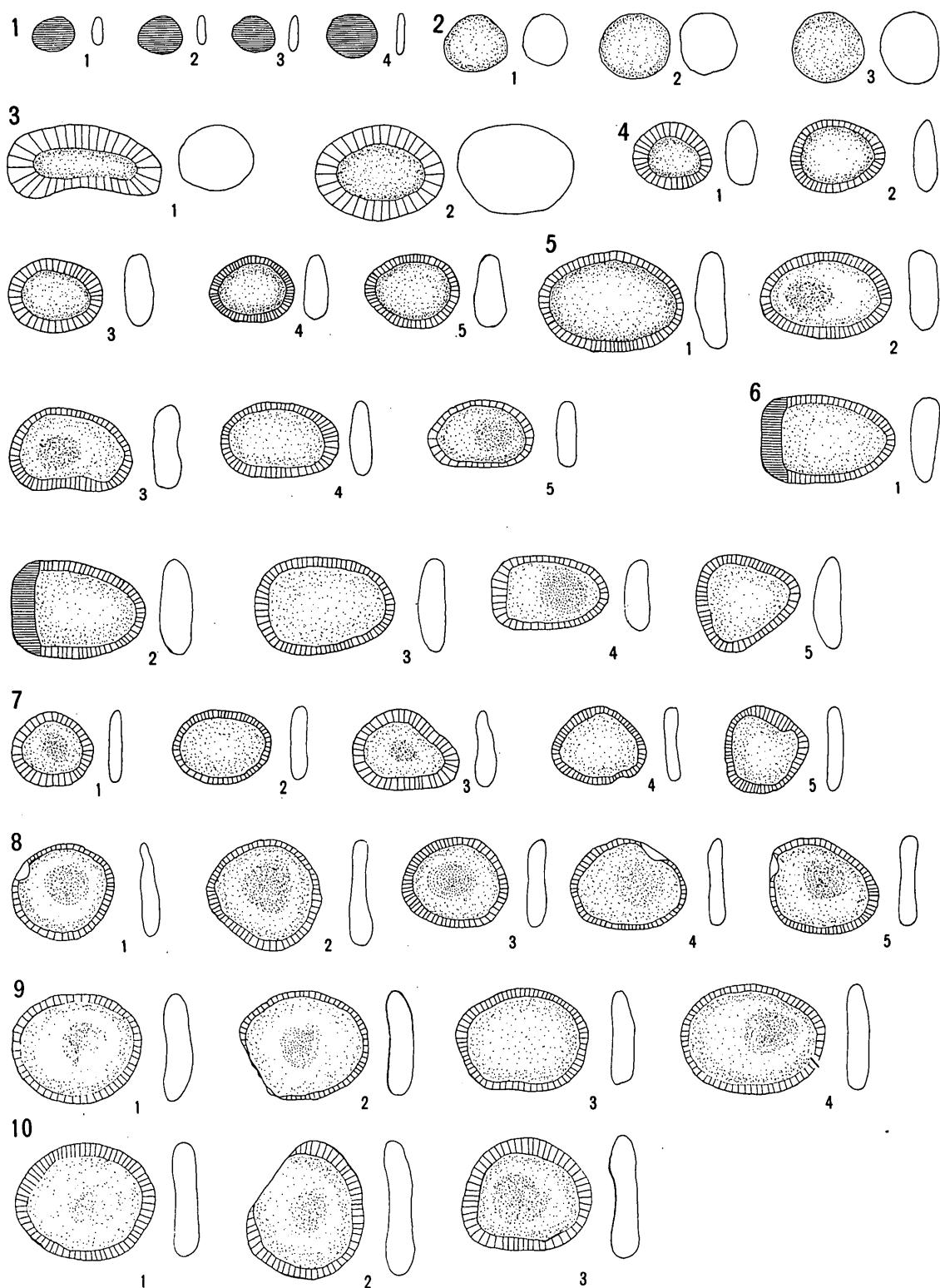
3 6 組



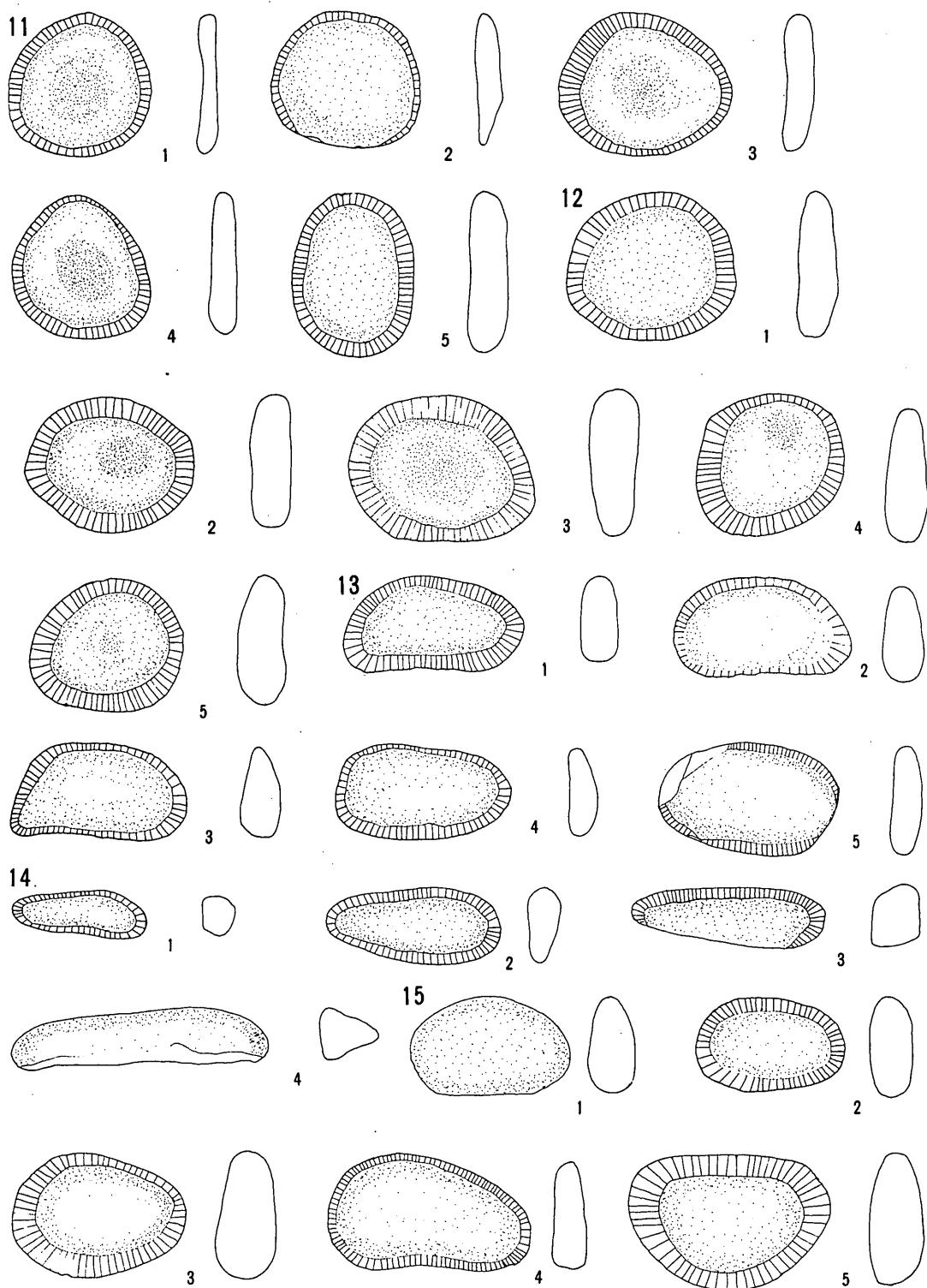
4 凹み石



9図 溝状遺構出土丸石（1～10組）（1：3）



10図 溝状遺構出土丸石（11～14組）（1：3）



11図 溝状遺構出土丸石（16～21組）（1：4）

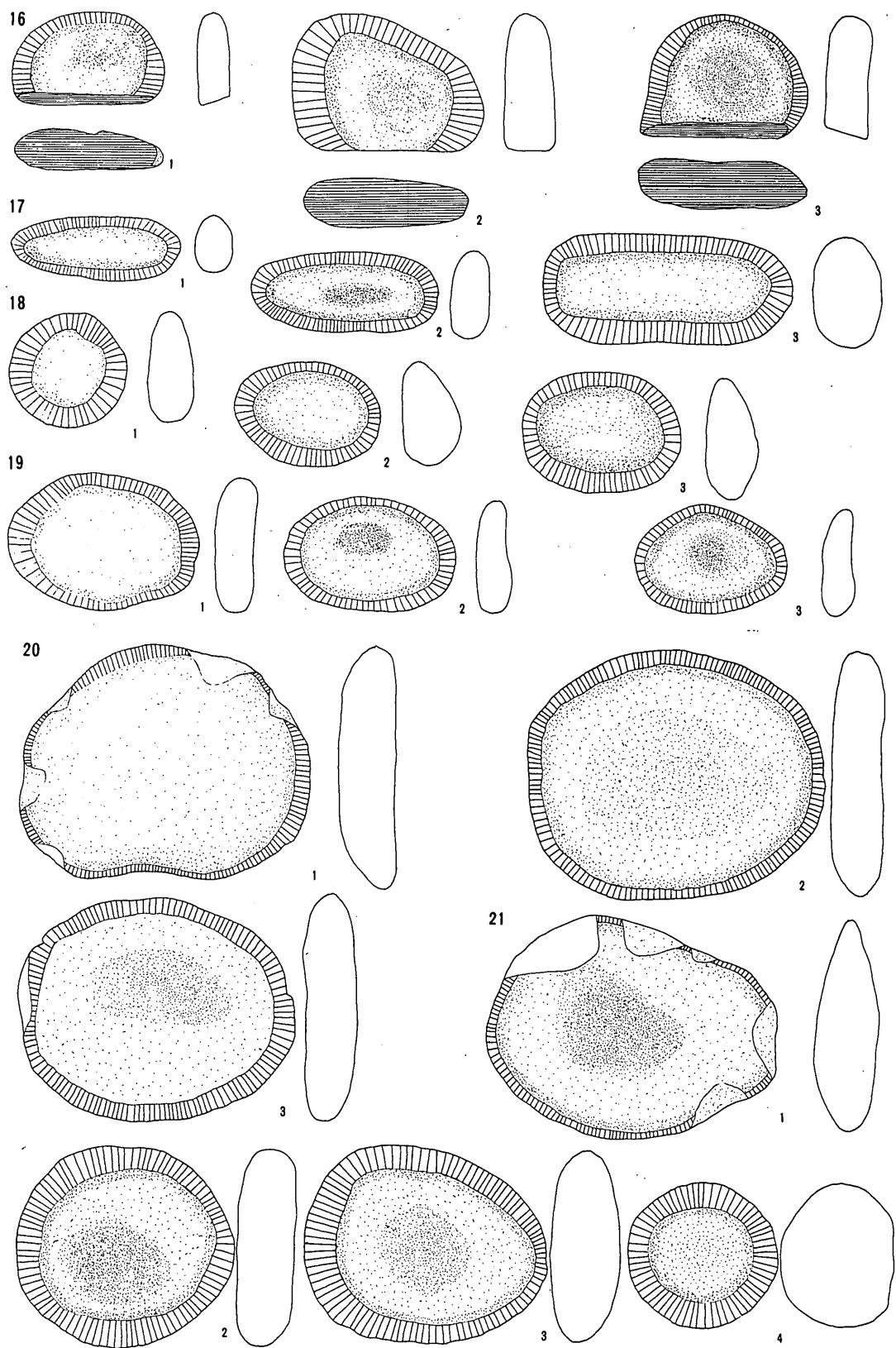


表 溝状遺構出土円礫（丸石）主なものの一覧

番号	整理番号	重 量g	特 長	番号	整理番号	重 量	特 長
1	1の 1	5 以下	薄く両面擦磨	46	11の 5	130	
2	1の 2	"	"	47	12の 4	120	
3	1の 3	"	"	48	12の 1	150	
4	1の 4	"	"	49	12の 2	150	
5	2の 3	20	"	50	12の 5	"	
6	2の 1	30~40	球 状	51	12の 3	240	片 面 に 凹 み
7	2の 2	"	"	52	13の 3	80	擦 磨
8	3の 1	120	た ま ご 型	53	13の 4	"	片 面 に 凹 み
9	3の 2	240	"	54	13の 5	80~90	
10	4の 1	20	周 囲 擦 磨	55	13の 1	100	
11	4の 4	"	"	56	13の 2	110	
12	4の 3	20~30	"	57	14の 1	30	
13	4の 2	30	"	58	14の 2	60	
14	4の 5	"	"	59	14の 3	70	
15	5の 3	20~30	片面にたたき凹めたあと	60	14の 4	120	
16	5の 4	40	"	61	15の 2	100	片 面 に 凹 み
17	5の 5	"	"	62	15の 1	110	
18	5の 1	60	"	63	15の 4	120	
19	5の 2	"	"	64	15の 3	150	
20	6の 4	30~40	長三角形 分銅型	65	15の 5	210	片 面 に 凹 み
21	6の 5	"	"	66	16の 1	230	
22	6の 1	50	"	67	16の 2	420	
23	6の 3	"	"	68	16の 3	600	
24	6の 2	70	"	69	17の 1	220	
25	7の 1	20	薄く磨いた感じ	70	17の 2	280	
26	7の 2	"	"	71	17の 3	750	
27	7の 3	"	"	72	18の 1	270	片 面 に 凹 み
28	7の 4	"	"	73	18の 2	350	
29	7の 5	"	"	74	18の 3	390	
30	8の 1	30~40		75	19の 3	210	
31	8の 3	"		76	19の 2	300	片 面 に 凹 み
32	8の 4	"		77	19の 1	480	
33	8の 5	"		78	20の 2	1,560	片 面 に 凹 み
34	8の 2	50	片 面 に 凹 み	79	20の 1	1,730	片 面 擦 磨
35	9の 2	"	"	80	20の 3	2,120	
36	9の 4	"		81	21の 4	1,000	
37	9の 1	70	片 面 に 凹 み	82	21の 2	1,080	片 面 に 凹 み
38	9の 5	"		83	21の 3	1,280	
39	10の 3	60		84	21の 1	1,500	
40	10の 1	70	片面にたたいてある				
41	10の 2	80					
42	11の 1	90	片 面 に 凹 み				
43	11の 2	90	"				
44	11の 4	110	"				
45	11の 3	130	"				

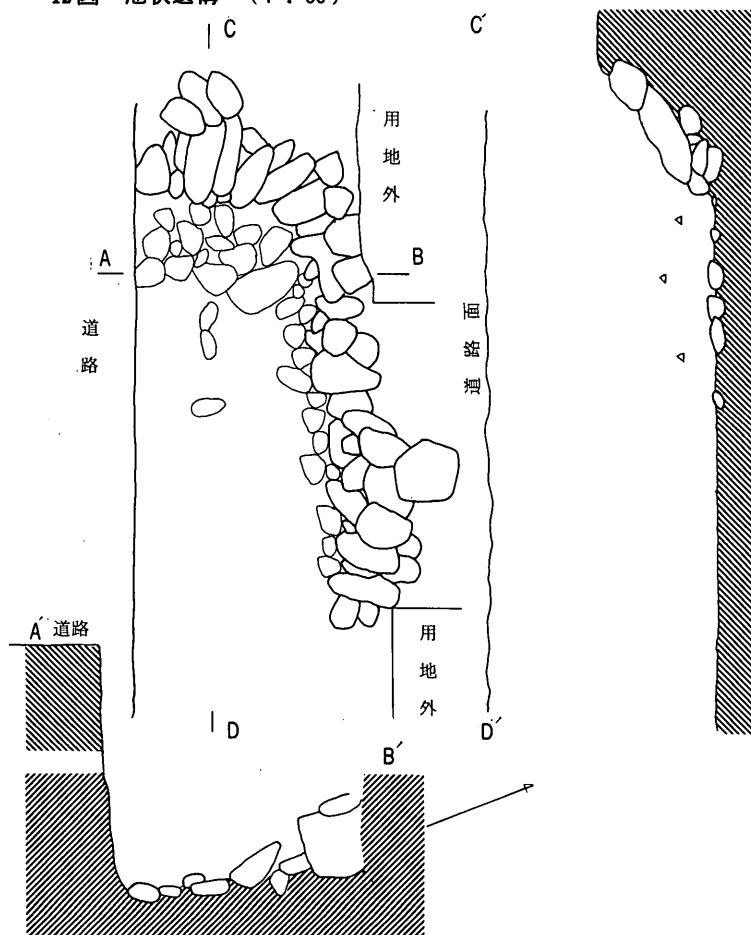
(2) 池状遺構

① 遺構 (4図・12図)

溝状遺構の西端からやく 7 m 西、現道下にかかって存在した池と思われる遺構である。東西やく 4.4 m にわたって石積みが並び、その南西には、上層は黒褐色泥土、下層は青灰色泥土が堆積し、その下には石がない。規則に並んでいた。

西北の石積は方形状に続いているが、東北では切れて続かない。南側は道路の下 1.9 m ほどの位置にあるため拡張することも出来ないので未調査のため、この池の規模、形状は不詳である。調査区の範囲で見た石積み規模は大きく、所によっては 3 段積みの所もあった。

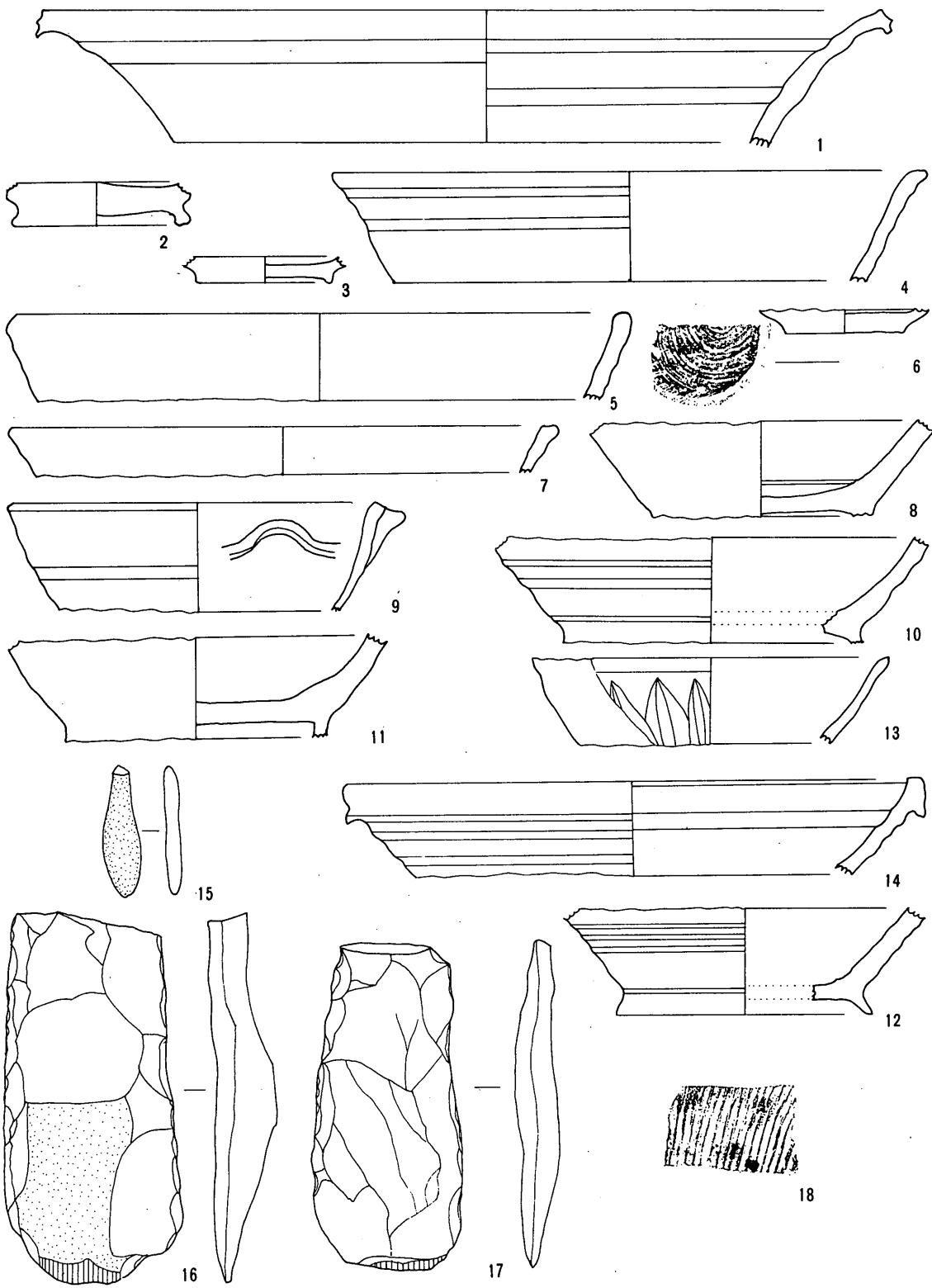
12図 池状遺構 (1:60)



② 遺物 (13図)

遺物は陶器片、石器、木椀の他竹、木片、植物種子等が多く出土しているが、表土下 1.4 m ~ 1.7 m ほどの所に堆積した黒褐色泥土中から出土している。13図の 1 は須恵器硬質の大甕の口縁、2 は高台付須恵壺の底部で奈良期くらい。3 ははり付高台の灰釉壺底部である。4~12 は山茶椀系の大平鉢・片口鉢・小皿で、9 の片口鉢は溝状遺構西側出土のものと接合され、溝状遺構と池状遺構の関連性を示す重要な遺物となっている。12 は表面が褐色を呈す山茶椀であるが、高台が特異である。13 は暗緑色の青磁輪花椀、14 は硬質茶褐色の擂鉢、18 は須恵器片、15 は磨石、16・17 は弥生系の打石器である。この場合も大平鉢が多く、溝状遺構出土のものと同様、器内面の擦磨されたものが目立っていた。陶器は溝状遺構のものとの時代差はなく、13~14世紀のものが主体と思われる。

13図 池状遺構出土土器 石器 (1:3)



IV 調査のまとめ

1. 北浦遺跡中調査区の立地

北浦遺跡は栗沢川の北岸、小段丘端にあって、弥生・古墳時代の遺構検出が予想されたのに、低湿地的傾向を示し、この低地を利用した中世工房址が検出された。この事は、飯田・下伊那地区の段丘堆積層の編年に基づいて位置づけられた低位段丘Ⅱ南条面の特質をよく示している。即ち、北浦遺跡は、南条の内、小段丘上にありながら、栗沢川によって、南・西に続く別府面に湾入する所で、その中でも表採調査、過去における遺物出土土地から推して、湾入部の中程に位置することがわかった。下方グリットで見られる青白色粘土質土と砂礫層の堆積、上方における1.5m下黄砂質土中に埋没する多量の流木の堆積がそれを物語っている。その地形の中の微高地を利用して、中世の製鉄工房址が存在していたものと推定したい。

2. 溝状遺構と池状遺構の性格

今回の調査によって確証する遺構の発見はなかったが、遺物等の状況から中世の製鉄工房址関連遺構と仮定したい。溝状遺構と池状遺構と直結されているのかどうかはわからないが、位置関係、方向、間隔から見て連なる可能性大と見たい。出土した陶器片は非常に類似している。とくに山茶椀片口鉢の接合、大平鉢の共通器型、内面擦磨の状況等から見て同一時期と見たい。山茶椀の特長から見て13~14世紀の所産と見られる。

フイゴ羽口、玉鋼状鉄塊を含む多量の鉄滓が出土している事は何れにしても鍛冶工房址か、製鉄工房址と考えられよう。羽口の先端部位には鉄の熔滓が付着したり、その基部に近い所は羽口自身が熔解して黒色タール状に変容している。鉄滓についてはアメ状鉄滓と海綿状鉄滓があるが海綿状鉄滓の比率が非常に高い。海綿状鉄滓中、半球状を呈するものも多く、これを玉鋼状鉄塊と扱っている。しかし乍ら、玉鋼と断定するためには、専門家の鑑定を受けなければならないし、鉱物組成分析を待たなければならないと思う。鉄滓といつても、製錬滓であるのか、鍛冶滓又は鋳物滓であるのか、素人の吾々には判り兼ねることが多々あるので、時を見て専門家の鑑定を受けたい所である。

大小様々な円礫の事であるが、発掘調査中気のついたことは溝状遺構とその周辺に限られており、出土地域はほぼ全域に亘るが、何か所に集中出土か所があった。兎に角拾い集めて形態的に分類し一応整理したものが、表である。1の組から21の組に分けたが、何組かの球状、分銅状のものを除くと、扁平な円礫で、周囲を擦磨しており、両面又は片面の一部をたたき凹めてある。

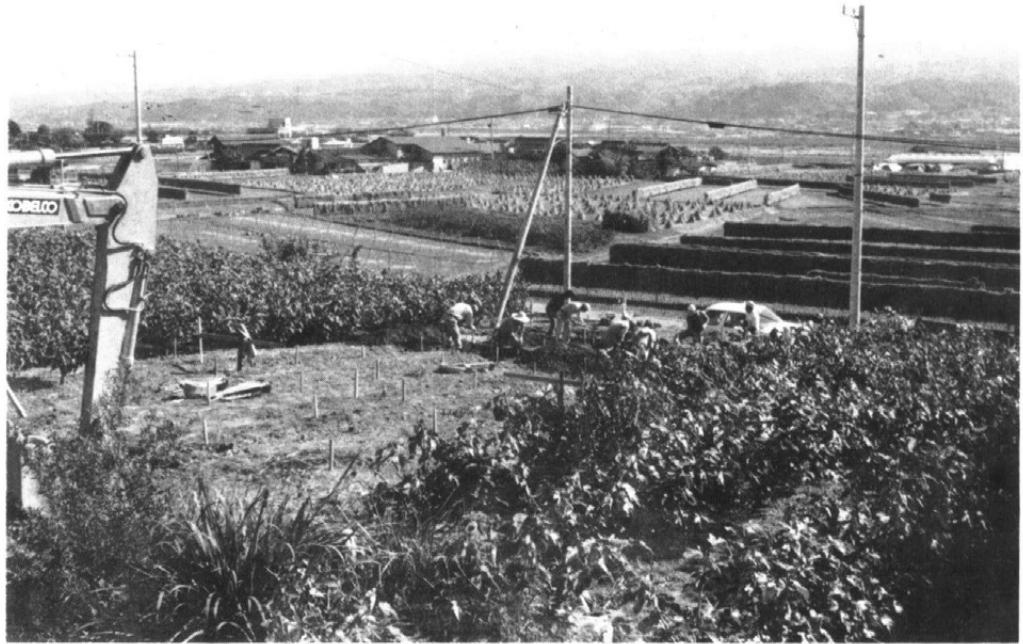
用途が何であるのかわからないが、重さ基準としたものか、製鉄工程上必要としたのか全くわからないまま記録することにしたのである。

製鉄遺跡と仮定したものの、炉形があるわけでなし、火床さえ見つかっていない。るっぽがあるのか、野鉢に伴う施設・容器は何もない。しかし、製鉄工房址に関連深い遺物出土と判断し、用地外のどこかに火床があったと思っている。出土した溝状遺構とその周辺から出土フイゴ羽口の破片、散乱状況から推して、羽口廃棄の折投げ込まれたものと判断したい。溝の中から炉壁片さえ出土していない事から製鉄炉破壊による破棄でないであろう。製鉄炉が近くにあったと仮定して、北か、南か、西上方か決める材料は乏しいが、地形条件から考えれば、南・西の栗沢川寄り高地域が良さそうに思う。陶器片の分布で見ると南・西が多い。フイゴ羽口の出土状態で見れば、北から投げ込まれたようにも思える。何れにしても上方、南、北にある微高地、傾斜面利用の炉址があったと見たい。

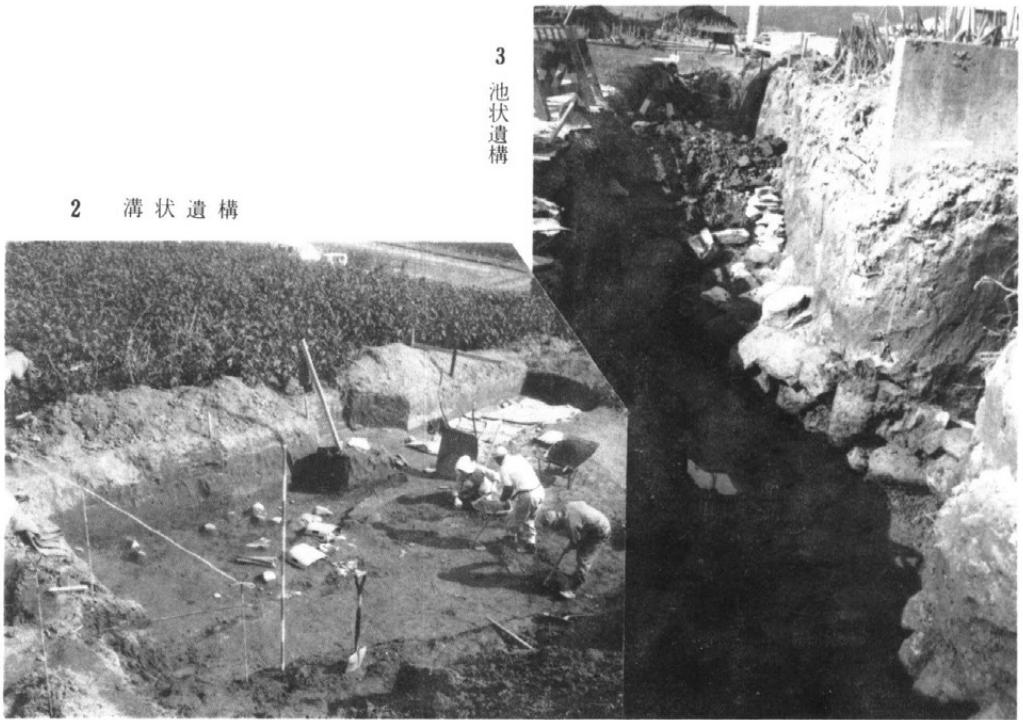
3. 上郷町低位段丘Ⅱ地籍の遺跡群の解明

飯沼・南条・別府地籍に広がる低位段丘Ⅱ地籍には郡下稀有濃密遺跡が目白押しである。同町教育委員会の主体事業として実施された町内詳細分布調査は、画期的な事業でその成果は高く評価される。しかし、あくまで表面分布調査であって、発掘調査によって初めてその目的が達成されるわけで、その意味からすれば、昭和58年度の堂垣外遺跡発掘調査、今回の北浦遺跡の発掘調査は貴重である。そうは言っても、飯沼・南条・別府地籍の数多い遺跡群の中ではほんの一部に過ぎないわけで、未解明の地域の一部といっても過言ではない。

数年来発掘調査の進んでいる飯田市座光寺恒川遺跡群内では、古代伊那郡家所在有力視される成果が上っているだけでなく、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世に至る文化様相が解明されつつある。この文化様相は上郷地籍とて変りはなく、これに優るとも劣らぬ文化圏の広がった所である。国道153号線周辺の急激な開発事業の進展は、遺跡究明には惜しまれて余りある事であるが、農業構造改善事業、道路整備事業等の多い現今、堂垣外遺跡・北浦遺跡の様な町当局の積極的な文化財保護施策の推進を願って止まない。



1 小段丘端から南条面を望む



2 溝状遺構

3
池状遺構

図版 4
溝状遺構 1.
2



1 溝状遺構 全景（西上方から）



2 溝状遺構 1 水落口



3 溝状遺構 2 円礫出土状況

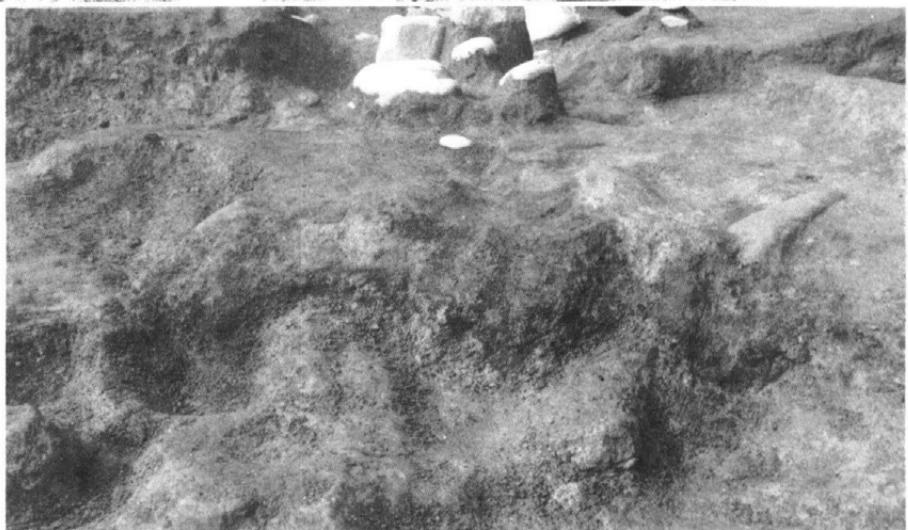
図版5 溝状遺構1

水落口



1 西上方 水落口

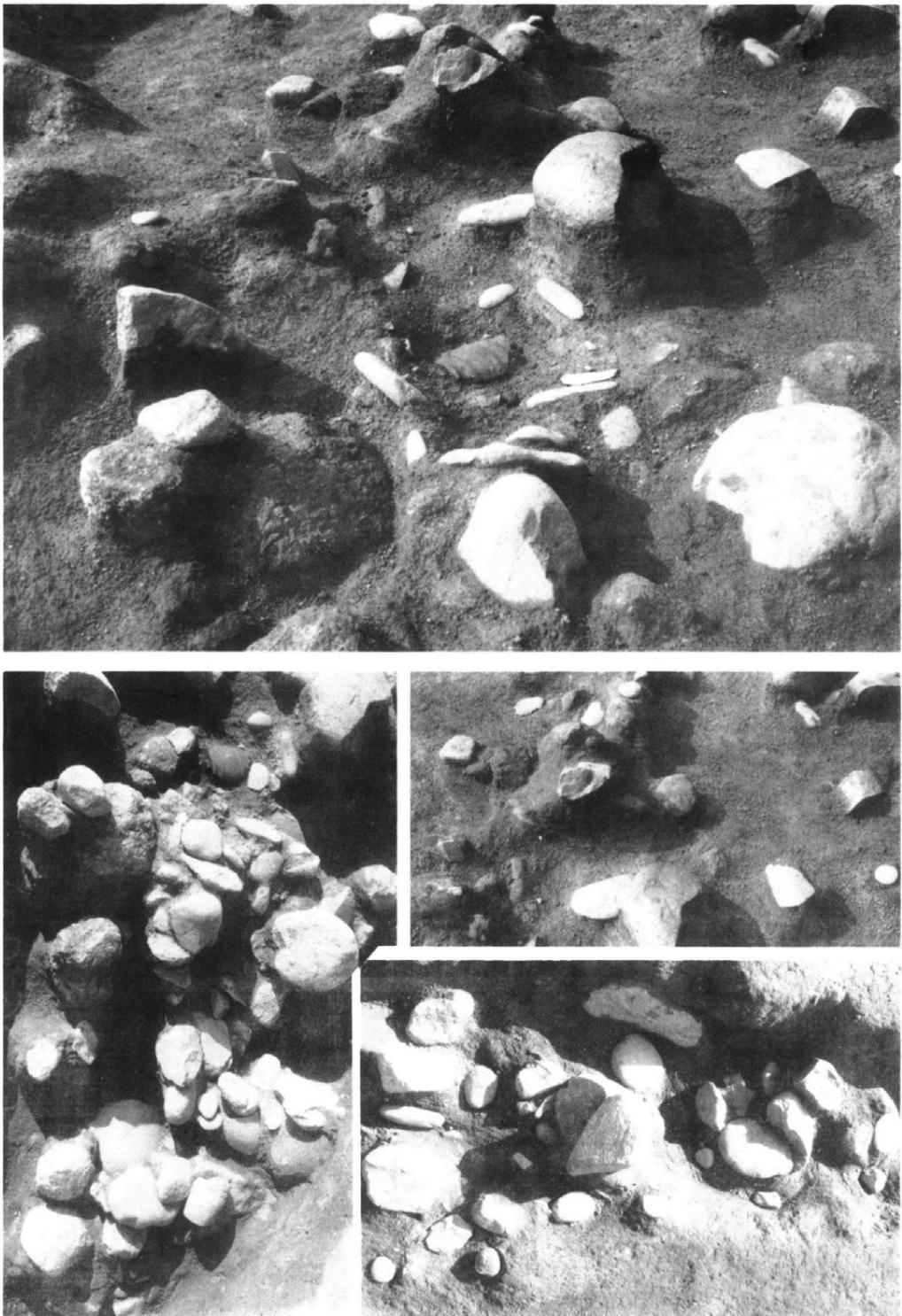
2 鉄分層と粘土層



3 上方溝 (石の並び)



図版6 溝状遺構遺物出土状況

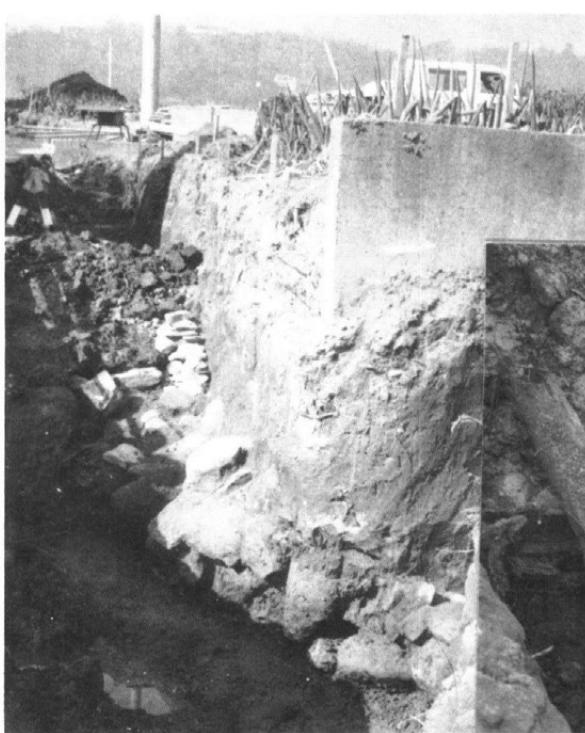


図版7

池状遺構



1 石組状況

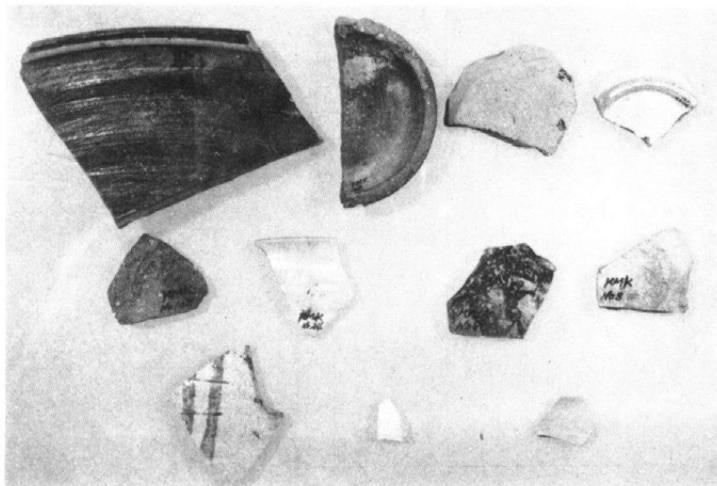


2 池の石組

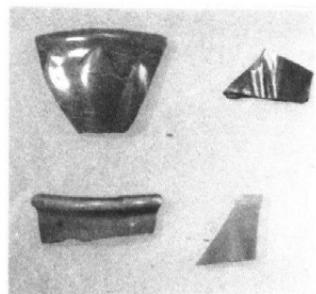


3 材木の出土状況（西上方）

図版8
出土陶器

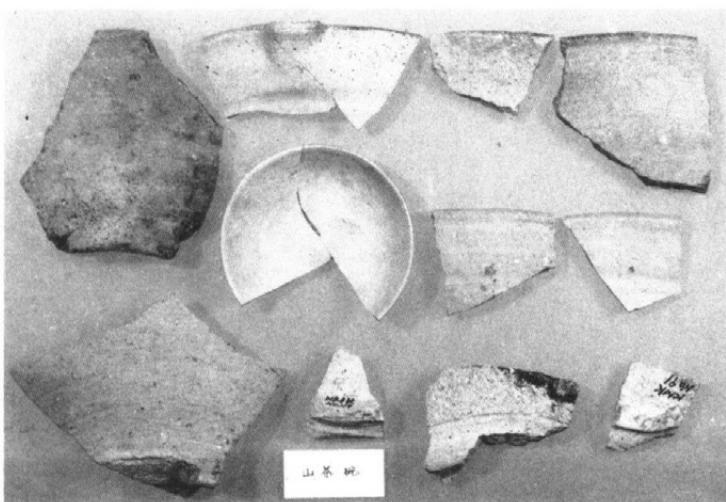


青 磁



瀬戸系

1 2 池状遺構の遺物



山茶碗

3 溝状遺構の山茶碗

擂 鉢

後記

序文において町長がのべている工事の施行は緊急を要することであった。しかしながら当該地は当町遺跡分布図にも明示された周知の埋蔵文化財包蔵地、北浦遺跡の一角であり、当然調査を実施すべきものがありました。

当該事業の施行担当部局建設課と教育委員会事務局担当と事務レベルでの協議の上、2者は昭和59年10月24日午後日本考古学協会会員今村善興先生にご相談にうかがったところ、ご多忙にもかかわらず、全面的にご協力いただけたこととなり当日現場をご確認願った。以後発掘調査に関する経過は本文中に先生が記述いただいているところで明らかであるが、前述のように緊急を要するが故に文化庁に対して行なう文化財保護法57条による通知書、同98条による通知書、その他事務的手続きも繁忙を極めました。しかし再び当該地工事区域の状況を将来みることはできないことであり、そこに眠る文化遺産がどんなものなのかを明らかにすることは不可能になることを重視し、文化財保護の重要性を思うあまり発掘調査を実施することにしたものです。

本調査についての結果は本書に記されたとおりであり、今後の古代文化や中世文化の解明のために大きな貢献となるものと信じます。この間に発掘調査から製図整理、本文記述に至るまで多大な尽力を賜った今村先生をはじめ多くの皆さんと土地所有者高田善作氏のご協力ご支援に感謝の意を表します。

昭和60年3月11日

上郷町教育委員会

北浦遺跡調査委員会

岡田道人	上郷町教育委員会委員長
関島昌平	同 教育長
北原忠夫	同 委員
小室伊作	同 委員
矢崎和子	同 委員
小木曾英寿	上郷町文化財保護委員会委員長
牧野光彌	同 副委員長
麦島正吉	同 委員
稻垣 隆	同 委員
菊本正義	同 委員

北浦遺跡

1985. 3

長野県下伊那郡上郷町建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷 (株) 新葉社

